

GIII vol. 124 本と人と作品の空間を考える 01

「ねじれたライブラリールーム」関連イベント

アーティストトーク&ワークショップ

日時 2018年8月18日(土)14:00-15:30

場所 熊本市現代美術館 ギャラリー III

講師 松延総司 (アーティスト)

司会 池澤茉莉 (熊本市現代美術館学芸員)



GIII vol. 124 本と人と作品の空間を考える 01 「ねじれたライブラリールーム」

会期 2018年8月15日(水)-9月17日(日)

会場 熊本市現代美術館 ギャラリー III

■ねこがねころんだ

松延 僕の作品は、インスタレーションだったり、彫刻だったり、ドローイングだったり、写真だったり、今回の展示でもいろいろなメディアを使っています。画家とか彫刻家だったらもう少し説明しやすいのですが、自身がどんな仕事をしているのか、いつも使っている写真というか文があります。それは「ねこがねころんだ」というダジャレです。僕はこの「ねこがねころんだ」というダジャレが大好きで、ダジャレの中でも一番面白いと思っています。

このダジャレの面白さに気づいたのは大学生のときで、とある先輩のアーティストがダジャレについての考察をしていて、その中では「布団が吹っ飛んだ」が一番面白いとされていました。その理由は明確で、「布団が吹っ飛ぶ」というダイナミックさ、イメージのしやすさ、非日常性がそこに含まれているというものでした。一方で最も面白くないとされていたのが「ねこがねころんだ」で、その理由はそこには動きと驚きがないということだったのを覚えています。

でもそこで僕が感じていたのは逆で、「ねこがねころぶ」という普通の出来事の中に、何の違和感もなくシャレが含まれている、そして猫が寝転んでいる限りそこにダジャレが持続している、ということこそが面白かったのです。

「アルミ缶の上にあるミカン」も良いですが、「ねこがねころんだ」の方がシンプルなのと、そこに空気感のようなものがイメージできる分良いと思っています。そして猫について調べてみるとその名前の由来は「寝子」であるという一説もあります。いつも寝ているから「寝子」。つまり「ねこがねころんだ」は猫の原点を捉えた描写とも言えるのです。

実はこのような同語反復（トートロジー）は美術の中ではよく使われる手法です。

絵画の一ジャンルとして「画中画」というものがあります。絵の中に絵が登場することや、絵を描く人物が登場することです。17世紀のフランドルの画家ヴィレム・ファン・ハーヒトの作品を見てみると、絵の中が絵で埋め尽くされ、まさに絵画についての絵画になっています。

また、ルネ・マグリットの《イメージの裏切り》（1929）も大変興味深い作品です。パイプの絵の下に書かれた「これはパイプではない」という文字は、自己言及的にイメージを扱い、イメージとは何かの本質に迫っているように思えます。

彼らと同じように、物事の本質を捕まえるために、僕も同語反復（トートロジー）の手法を用いて自己言及的に物事を扱っています。だからジャンルは関係なく、むしろ何の本質を捕まえようとしているのか、その主題の方が重要です。その主題については後ほどお話ししたいと思います。

■数字

松延 数字についてもたまに考えることがあります。数字もそのうち作品にできればと思っています。僕らがよく使うアラビア数字が世界基準になっていますが、もちろん世界には、漢字の「一、二、三、四、五」のように、いろいろな国にいろいろな形の数字が同じ概念のものとしてあり

ます。タイの数字の「๑ ๒ ๓ ๔ ๕」なんてただのぐるぐるで、何て書いてあるかタイ人じゃないとまったくわからないと思います。アラビア数字ひとつとっても、12世紀から15世紀にかけてかなり形が変化している。僕らが普段なんとなく使っている単なる数字でさえ形が変化するものだということがわかります。僕がよくやる妄想は、もしこの世に何かすごい大変革が起こって、1が3になって、2が5になって、3が8になって、4が2になって、5が1になって、6が7になって……というふうに数字同士がぐちゃぐちゃになっていったら、「 $125 + 238 = ?$ 」と言われたときに、「えっ、何それ?」という、わけがわからないことが起こったりすると思うんです。こう考えると、僕らはいろいろなものを自分なりにもう一回考え直して、自分なりに再定義することができる。豆腐だって、赤ちゃんだって、髪の毛だって、靴だって、何でもそのものの本質を問うことはできます。じゃあその膨大な数の中で、僕が何を作品のテーマにしているかというと、「線」と「影」に興味をもって作品にしています。

■線と影

松延 なぜ線と影をテーマにしているかというと、僕が考えるに、線と影が一番よくわからないもの、みんなが知っているけど実態がないものだと思っているからです。例えば、「線」と聞いたときに、みなさんは頭の中に黒い細いものが思い浮かぶと思いますが、それが実は糸なのか、それともボールペンで書いたインクの線なのか。一応「線」と言いますが、糸とかインクとかその他いろいろな物質に置き換えられる限り、それはまだ純粋な線ではないというふうに僕は考えます。

では一番何が線的かというと、「ひび」です。ただのひび。これが非常に線的だと思っています。ひびって何だろうと考えると、この世に物質として存在しない。ひびというのはあくまでも、物と物がずれてその間にできた隙間でしかなくて、ひびを僕らは一応見ることはできますが、ひびだけを触ることはできない。ひびだけを手にもつことはできない。ひびというのは、そういうものだと思っています。では、手に取れないひびをどう手に取れるようにするか、どう影だけを手に取れるようにするかということを、僕は作品の中で試んでいます。

文明によって違うと思うのですが、僕らが一番はじめに線を引きはじめたとき、どういう物で描いていたかというと、おそらく石とか枝とかを手にもって、それで地面とか骨とか石とかを削っていたのが、一つのはじまりだと考えることができると思います。線というのは、そこにインクとかをのせていたわけではなくて、単なる平面上に傷をつけて、凹みをつけていた。空間をつくっていたというのが、文明としての線のはじまりだと僕は考えています。そうすると、この「ひびの線」と、削って「空間をつくった線」が同じようなものに見えてくる。甲骨文字の拓本を見ると、本当にひびと線が一体化して、どっちがどっちかわからないということが起こっています。書の歴史、文字の歴史を見てみると、あくまでも、影として凹んでいる部分、人が削って凹ませた暗くなっている部分の代用品として黒い墨が使われていることが、なんとなくわかると思います。

中国の皇帝・徽宗の書などを見ていると、インクをのせたというよりか、削って、切り裂いて、削り取ったという意味を感じられると思います。

ちょっと時代が飛ぶのですが、ルーチョ・フォンタナというイタリア画家の《空間概念》という作品があります。この人の作品は、キャンバスに絵の具をのせるのではなくて、キャンバスを切る。切るのか削るのか、何と言えいいかわからないですが、とにかくキャンバスに絵の具を塗るのではなくて、逆にキャンバスに穴を開けて、ポジではなくてネガの方の部分を作品にしているというアーティストです。同じフォンタナの作品で、切るのではなく空間にネオン管でグルグルを描いている作品《struttura al neon》がありますが、まるで空間が裂けたように見える作品です。

これらの資料からもわかるように、僕が思う線というのは、紙の上にインクがのっている状態ではなくて、何かを引っ掻いたりとか、削ったりする痕跡です。そこには動作だけがあって、色は存在しないと思っています。

■物の存在

松延 ここからまたさらに飛躍するのですが、じゃあなぜ「輪ゴム」であったり、「鼻歌」であったり、「石」という物を作品に使うかという、輪ゴムは確かに丸い線状の物ではあるのですが、輪ゴムというのは私たちにとって日常の中で、かなりベーシックな何も主張しない物だと思います。その辺に当たり前に転がっていて、何もありがたみがない物。そういう物って、指輪とかに比べると、かなり感覚的に凹んでいるというか……。何となくわかりますか？ あまりありがたみがない、非常にフラットに近い、もしくは凹んでいるという感覚をもつ物だと思います。石も鼻歌も、そこにあるにもかかわらず、そこにあることをあまり自覚しない。あってもなくても一緒。そこにぽっかり穴が空いているような物として存在しているのではないかと僕は思っています。そういう思いがあって、輪ゴムであるとか石であるとか鼻歌という物を、今回は「作品」として、この場所に置いています。

■本の話

松延 ここからもう一つ飛びまして、僕が思う本の話をしたいと思います。僕は小学校のころから、結構本を読みました。何を讀んだかは全然覚えていないのですが、とにかくたくさん本を讀んだことは覚えていて、いろいろ讀んだと思います。本はすごく好きです。なぜかという、物としてそこにずっと留まっている。もちろん、本をめくればそこには物語が広がって時間軸があるのですが、やっぱり物質として、そこにあるのがすごくいいなと思います。逆に映画は結構苦手です。なぜかとよく人に聞かれるので考えてみると、映画を見ている間は（特に映画館だと）、自分のタイミングで停止することができないし、なおかつ、あのスクリーンと音量でこら

れると、こっちとしてはそこで何が起きているかを考えることができなくて、ただただ圧倒されて時間が過ぎてしまうという感じがするんです。翻って、本は自分が好きなときに読みはじめて、わからないなと思ったら戻って読める。そういうところが自分としてはしっくりきています。

線の話に近づけていうと、本は昔からあると思います。それ自体が人間の文明の記録として、人間が生きてきた痕跡としてあるということもいえると思います。本を開くと、そこには時間軸がある。僕が本を読んでいる感覚というのは、本の中にあるストーリーの中を、自分がぐぐっていくような感覚です。それは線の中を自分が通っていくような感覚にもすごく似ていると思います。また、本というのは箱状なので、それを開けてみるとその中に空間があるという感覚だとか、本を開く、本を割る、ページをめくる、ページを一枚ずつ削っていくといった感覚も、本が好きな理由かもしれません。

あと、これは重要なことなのですが、僕は作品についていろいろ喋るのですが、僕の作品はつくる工程も複雑ですし、そこにどういう意図があるのかはかなり大事な部分です。なので見るのも重要ですけど、それがどういう物なのか、脳内で作品を鑑賞するという感覚が強いと思っています。本を読むという行為も、本をずっと見ているけれども、それよりか頭の中で物語が流れていく。脳内で物事が起こるという感覚があります。それが、僕がつくっている作品と非常に近い部分があると思っていて、「本を読む」という行為からたくさんのアイデアをもらっています。

石



fig. 1 松延総司 《My Stones》 2011 セメント 作家蔵

松延 これから自分の作品の話をします。会場にある作品から一個一個、説明していこうと思います。まず真ん中にある石《My Stones》（私の石）（fig.1）ですが、この作品はセメントと水と混ぜて、泥だんごをつくるみたいにして手のひらで転がしてつくった手作りの石です。一個一個には全然時間がかかっていなくて、一瞬で手のひらで丸めて、その辺に置いて乾かしたものです。自宅にあるものを合わせると、今 13000 個ありまして、全部、写真に撮っています。屋外で展覧会を行うこともあり、そのときは石を野外にばら撒いて、そのまま搬出せずに、その土地に放置して帰ってくるということをやっています。何がやりたいかという、世の中にある石というのは、火山から生まれて、川を転がり、波に揉まれ、風にさらされ、そういうふう、いろいろなものに削られてできた、わりと年老いた石だということができるのではないかと思います。それに対して僕は、削れた部分のない、（影のない）新品の石って、どうやってつくれるのだろう？と思い、自分でセメントの団子をつくって、仮にこれを「石」と呼んで、今から「はい、スタート!」というふうにしたら、新品の石が段々今から石になっていく過程みたいなものが見えるのではないかと、つくりはじめた作品です。

参加者① 石をつくるときは、何か工夫が必要なんじゃないですか？

松延 その工夫はとても難しいです。いきなり適当につくるようにしているのですが、それに常にとどこまでを適当というかという問題があります。ちゃんとした丸をつくるのも適当といえる。だから、あまり意図せずに石に似せようとせずにつくっているのですが、たぶん、サイズ感だとか薄さだとか、石に似せようとしてつくっている部分もあると思います。

池澤 失敗作はありますか？

松延 失敗作は一応ない。世の中にどれだけの形の石があるのだろうということを考えると、失敗というものが逆にあってはいけないというふうに思っています。

参加者① この石と自然の石との違いは、自然の石は割れたりしますが、この石には割れたことによる直線的な面がないですね。

松延 そうですね。まだ割れてないので。割れたら、そういうものも出てくるかなと思います。今度、展覧会をやるのですが、この石の大きいやつをつくっていて、それを割ってみようかなと思っています。この石はここで見るとかなり石っぽいのですが、外にある普通の石と見比べると、何ていうかすごく「ぬるっ」としていて、きれいじゃないです。やっぱり自然の石は鉱物とかが入っていてキラキラしています。この石はほとんどそういうものが入っていないので、くすんでいて、実は全然自然の石とは似ていません。

参加者① 下流の方の石ですね。

松延 そうですね。洪水とかがあった後に下流の方で泥にまみれた石みたいではあります。

参加者① つくるとなるとなかなか難しいだろうなと思いました。

松延 そうですね。自然の石そっくりに、デッサンのように全く同じものをつくる方もいらっしゃると思います。それはそれですごいのですが、何かそれは……あんまり意味がない。意味がないといったら語弊があるのですが、僕がやりたいことではないなと思っています。

参加者① 大小もあってすごいなと思いました。私も時々、川に石を拾いにいくのです。

松延 石を集めるのも面白いと思います。石の作品は、棚にのせて彫刻作品みたいに（彫刻作品だとは思っているのですが）見せたり、神戸での展覧会では、とても大きな石をつくったりしました。もう壊してしまいましたが。

参加者① 大きな石も全てつくった石ですか？

松延 全部つくった石です。重たくてどうしようもなかったです。

参加者① 神戸で展示された大きな石は、すごく自然に近い感じがします。

松延 セメントは硬化するときに熱を持ちます。これだけ大きいものをつくろうと思うと、セメントを一気に使います。そうすると中の熱が外に逃げきれずに、セメントがマグマみたいなことがあります。だから、ちょっと自然の石っぽくなったのかなと思います。ギャラリーの中に自然っぽく配置したりすることもあります。最近は壁から浮いているように展示することもあります。

池澤 「私の石」という所属や主張があるタイトルは不思議な感じがします。なぜ「私の石」(《My Stones》) というタイトルをつけたのですか？

松延 プライベートな石って、存在しないのかなと思っています。石をコレクションしている人はたくさんいますが、それはあくまでもそこにあった石を自分の物にする。これは僕から出てきた石という、他の石と違う意味をもつものかなと思っています。たまにワークショップとかで、みんなに石をつくってもらうのですが、つくった石はそれぞれ、持ち帰ってもらうようにしています。ここにあるのは全部僕がつくった石です。

参加者② 「写真を撮っている」とおっしゃいましたが、小さいのもすべて一個ずつですか？

松延 はい。一個ずつ小さいのも撮っています。

参加者② じゃあ、13000 枚の写真があるのですか？

松延 はい。一応あります。僕のウェブサイトで見ることができます。でも一個一個がどれかというの、もうわからないです。

鼻歌

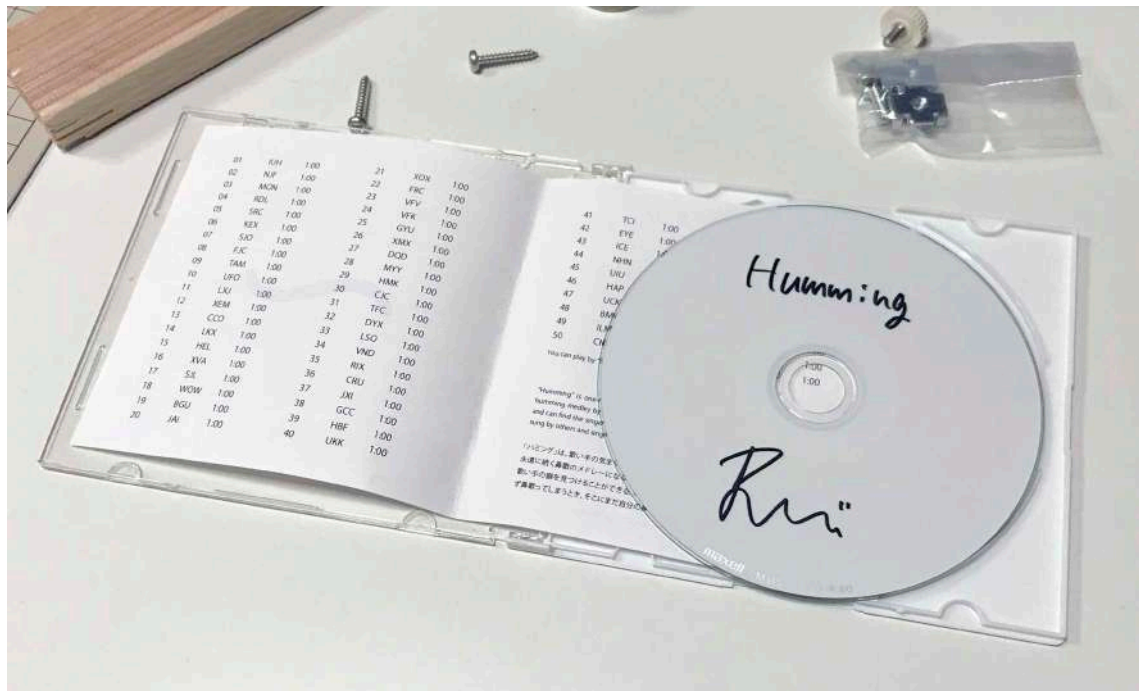


fig. 2 松延総司 《Humming》2013 鼻歌 作家蔵

松延 次の作品です。会場に「鼻歌」が流れていると思います。「鼻歌」は英語で「humming」というのですが、タイトルもそのまま《Humming》にしています。聴いているだけではわからないのですが、1分ずつの鼻歌が60曲入っているCDを流しています。それもなぜ鼻歌かという話になってくと思うのですが、石の形がそれぞれ全部違うように、何かの曲を真似したら上手いとか下手とかがあると思うのですが、オリジナルの鼻歌には正解／不正解がない。自分が好きなときに歌っていい。そうすると即興でいろいろな曲ができてしまうわけです。どういうリズムのものを録音してもいいし、途中で止まろうがいきなりはじめようが、歌い手の勝手です。

鼻歌と石は、すごく似ているなと思っています。実は会場に母がいるのですが、母は鼻歌をよく歌っているなと実家に帰ると思います。いま思うと、何かそういうところから、この作品のアイデアが生まれたのかもしれない。

輪ゴム

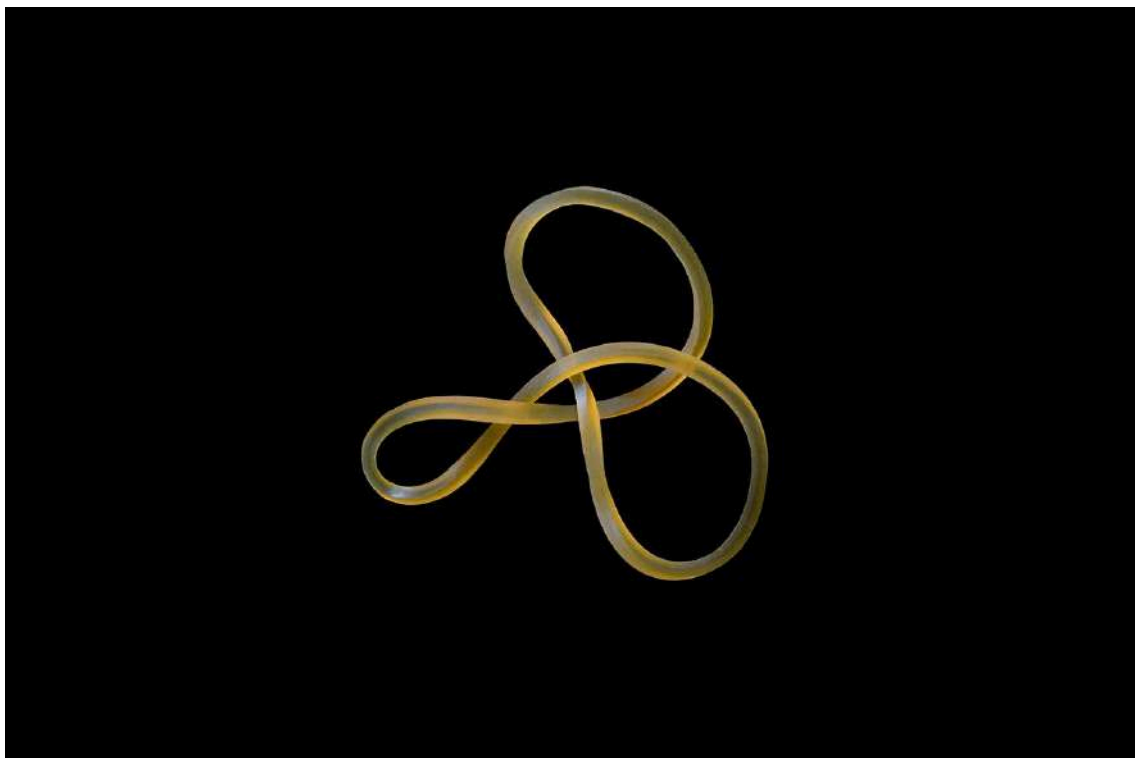


fig. 3



fig. 4

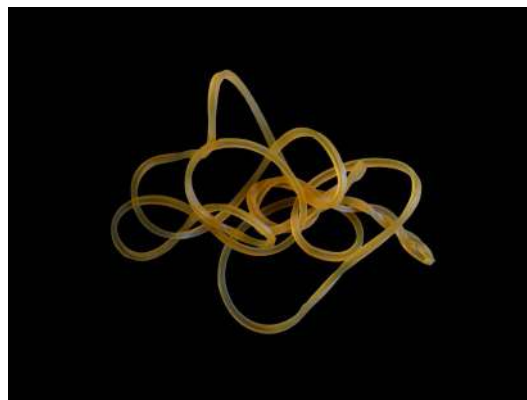


fig. 5

figs. 3-4 松延総司 《Twisted Rubber Band》 2012- 輪ゴム 作家蔵

fig. 5 松延総司 《Twisted Rubber Band (Letter)》 2018 タイプC プリント 作家蔵

松延 あとは輪ゴムの作品です。輪ゴムの作品は、スライド（《Twisted Rubber Band》）（fig. 3）、会場の奥にある実物（《Twisted Rubber Band》）（fig.4）、壁にかけている写真（《Twisted Rubber Band (Letter)》）（fig.5）の三つあります。モニターに映っているスライドのものは、一つの輪ゴムを一回ねじって写真に撮って、もう一回ひろげて、もう一回ねじって写真に撮ってということをしてつくった10枚のスライドショーからできています。一つのモニターには二つの輪ゴム分が入っているので、20通りの形が入っています。それが4面分あるので、80通りの輪ゴ

ムの形がでできます。壁にかかっている写真は、輪ゴム一個ではなくて、輪ゴムを二、三個繋げたものを、ねじって写真に撮っています。そうすると、もうちょっと複雑な形がでてくる。奥にある実物のものは、単にねじった輪ゴムがたくさん入っているという作品です。

輪ゴムの作品も、「石」と「鼻歌」の作品に非常に似た性質をもっています。何度か輪ゴムをねじってみるとわかるのですが、ねじれてできる形にはいくつかのパターンがあります。このパターンは手癖でつくる石の形状や、自分が好きなリズムや音程がどうしても鼻歌に現れてしまうのと同じことだと考えています。

これがこの会場にある、一応大きく分けると3シリーズの作品です。

【アプローチ



GIII vol. 124 「ねじれたライブラリールーム」 熊本市現代美術館での展示風景 2018

松延 なぜ「石」「鼻歌」「輪ゴム」という三つの作品を、僕が今回出したのかということも、もちろん話しておかなければならないことだと思っています。

一つは、本に対するアプローチというものを考え、本の中にある文字に対するアプローチとして、この「輪ゴム」のねじれが、象形文字のように見える、ということがあります。そういう文字と線に対するアプローチとして、「輪ゴム」というものが一つあります。「石」は、はじめに言ったように、紙ができる前、石を削ってそこに文字を書いたという歴史からみると、本でいう紙の代わりというふうに考えることができると思います。もう一つの「鼻歌」は、起承転結はないの

ですが、時間軸をもった話の流れというように考えると、ストーリーとして捉えることができるかなと思います。この三つを合わせると、何となく本を解体して、会場全体を本で包み込むというようなことが（無理矢理ですが）いえるのではないかと考えています。

もう一つは、ホームギャラリー（熊本市現代美術館内の図書スペース）に対するアプローチを考えています。ホームギャラリーは、天井にジェームズ・タレルの青い長方形の光の作品（《MILK RUN SKY 2002》2002）があります。ああいう物質がない、何もなくて一面しかないものに対して、床にマッシブな重たい質感を持つ「石」でアプローチしています。また、よく図書室にいくとBGMとしてピアノの音楽が流れていたり、ここのホームギャラリーでも毎晩ピアノの演奏をやっています。そういう図書室で流れる音に対するアプローチとして「鼻歌」を展示しました。「輪ゴム」は、そこにいる人の形として捉えてもいいのではないかと考えています。ホームギャラリーにはマリナ・アブラモヴィッチの作品（《Library for Human Use》2002）があります。ここの図書室では人がいろいろなところ本を読んでいます。寝転がってとか、作品の中に入ってとか。そこに対するアプローチとして、輪ゴムを見ながら本を読むというのが一つありえるんじゃないかなと思って、「輪ゴム」の作品をもってきました。

全体としては、パブリックな場所、整然と棚に並んだ本、静かな空間、そのようなイメージの図書室に対して、自身の身体を通して出てきたプライベートな、ノイズが混じったドロっとした空間を作りたいと考えていました。説明した通り、今回僕が展示した作品はいずれも無意識的な「癖」や「法則」によってできあがったものです。

■その他の作品 ①線



fig. 6 松延総司 《Knit the Knot》 2016- 型紙を使い、立体的に描かれた、フリーハンドの線 作家蔵

松延 これから会場にはない自分の他の作品の話をしていこうと思います。僕が他にどのような作品をつくっているのか、最近のものから話していこうと思います。一つは、線を使った作品《Knit the Knot》（fig.6）です。ぱっと見ると、一瞬で描いたぐるぐるの線というようなスピード感と乱雑さをもつ作品ですが、よくよく見ると、隙間の部分、線と線が重なる部分は、線と線がちゃんと重なっていて、どっちが上で、どっちが下かが、しっかりつくられている。なので、どの線が

どの線の上であって、どの下であってという、すごく複雑な立体的な側面をもったドロ잉の作品です。これをつくりはじめたきっかけは、線がぐじゃぐじゃと絡まったもの（たとえば絡まった糸など）を描くことがたぶん一番難しいのではないかと思ったところからです。デッサンとかで、よく透明の瓶とか卵とかが課題に出されますが、それよりも、ぐじゃぐじゃになった線が一番描くのが難しいんじゃないかと。じゃあ、それをいちいち描くのではなくて、もっと簡単なやり方で、線を立体的に描くことができないかなと思いつくりはじめた作品です。

つくり方をいうと、まず紙にぐじゃぐじゃと線を適当に描く。それをコンピュータでスキャンして、データ上で、線の重なっている部分を消していきます。それを今度はコンピュータのデータをなぞってくれるレーザープリンターで厚紙に焼きます。そうするとステンシルみたいな型ができる。そこにもう一回、鉛筆を刺して紙の上に描く。そうすると一瞬で描いたスピード感をもちながらも上下の複雑な絡まりをもったドロ잉ができる。また、形は同じなのですが、実は絡まり方が違うバリエーションがあります。

参加者③ 線についての他の作品をもう少し見せてください。



fig. 7 松延総司 《Cluster of Schema》2012- 立体的に交差する線が描かれた箱 作家蔵
SCHEMA, Kyoto.Köln. Schilling Architekten x Super Window Project Schilling Architekten 建築事務所（ケルン）での展示風景 2012

松延 お見せした作品《Knit the Knot》(fig.6) の立体バージョンのような作品《Cluster of Schema》(fig.7) もあります。この作品の面白いところは、横を見るとわかるのですが、ぐるぐるが描いてある側面も線がずっと繋がって一周しています。上も下も繋がっている。そうすると、どういうふうに見えるかという、実際には表面にしか線が描かれていないにもかかわらず、箱の中に線が入っていったような、ちょっとした錯視効果が現れます。

バリエーション違いとして、実線と点線の作品もあります。数学とかで立方体の図を描くときに、後ろにある空間は点線で描いて、前は実線で描くというルールがあると思うのですが、この作品に関しては点線というものを無理矢理、実線の前にもってきて、複雑な遠近をつくっています。これも同じく、箱の周りを全部繋げて描いているため、箱の中にまで線が浸透しているように見える。白い表面があるにもかかわらず、線があたかも透明なガラスの中に刺さって

いるように見えます。

僕の作品は線や立方体を使ったりするので、建築家の人がよく気に入ってくれます。そこから繋がるのですが、建築家の人は本を読むのがたぶん好きで、建築家の家に行くと書斎があり、本当にたくさんの本を持っている。立方体をつくるのが好きなのかはわかりませんが、たぶん「建築をつくる」ということと、「本をつくる」ということは、何か似たところがあるのかなと思います。この作品（《Cluster of Schema》）展示をした建築事務所では、建築家の人が図面を出して、仕事をしながら、それを手すりみたいなところにたくさんかけていました。そのやり方を真似して、僕もプリントアウトした作品をどんどん手すりにかけていくというようなことをやっていました。

参加者③ 立体作品《Cluster of Schema》（fig.7）とドローイング作品《Knit the Knot》（fig.6）は、どちらが先にできた作品ですか？

松延 立体作品《Cluster of Schema》（2012-）が先です。しかしその前からコンピュータを使って《Knit the Knot》のプロトタイプのようなものはつくっていました。そのときはまだ線を自分の手で描かずにコンピュータでつくっていました。でもそれは「線」じゃないと思ったんです。というのも、インクジェットプリンターやレーザープリンターから出てくる線というのは、インクの点々でできていますよね。僕は、インクの点々を写すことじゃなくて、描くことをやりたいと思ったんです。プリンターは、あくまでも点の集積が線に見えているだけで、線じゃない、と。じゃあ、それをどうにか自分の手で、鉛筆でつくり変えることができないかなと思って、一番はじめにお見せしたドローイングの作品（《Knit the Knot》2016-）に後から辿り着いたという感じです。

インクジェットプリンターが普及する前は、建築事務所にはプロッターというものがあって、A1 サイズとかの平たい机の上で、鉛筆がついたアームが、X 軸と Y 軸に動いてデータに沿って線を描いたりしていたらしいです。

参加者③ 写真の作品もあるのですか？

松延 透明の物を撮った写真シリーズ（《Ghost of Copy》2014-）などがあります。

■ その他の作品 ② 壁紙



fig. 8 松延総司 《Pattern of Dark》 2013 デジタルデータ 作家蔵

松延 この展示写真の壁面、壁紙が僕の作品です。前にかかっている写真や彫刻は他の作家の作品です。斜線も僕がよく使うモチーフの一つです。僕らがどういいうときにこの斜線を使うかというと、例えば間違えた文字を消すときです。ボールペンで書いていて、「あ、間違えた」というときに、消しゴムが手元にないと斜線で消す。もしくは、建築関係の方はよくわかると思うのですが、黒の部分や影の部分などを塗りつぶすときにも斜線はよく使われます。面白いことに、斜線はただの「線」なのですが、僕らはこれを勝手に黒の塗りつぶしとか、ここには何もありませんよ、というような意味で使う。線だけれども、それを線として認識していないという、すごく記号的なものだと思います。

この作品にもバリエーションがあります。この作品で言うと僕が実際に描いたのは5×5cmくらいです。それをタイル状にしてリピートさせています。近づくとも「全部ただの斜線じゃん」となるのですが、離れて見ると見たことのないようなデザインの模様がでてくるという作品です。微細な筆致の違いが、異なる模様を生み出すので、無限のバリエーションをつくることができます。このパターンはテキスタイルデザインとして布地にも印刷しています。

■ その他の作品 ③ 紙やすり



fig. 9 松延総司 《Room Sandpaper》 2016 リノベーション
"APartMENT" ROOM 203 (大阪) Photo by Yoshiro Masuda

松延 同じく壁紙のようなものとして、ちょっと違う作品があります。アパートのリノベーションを依頼され、そのときに僕なりにどういうアプローチができるかをいろいろ考えました。紙やすりも僕の作品の中にたびたび現れるモチーフです。これももちろん削ることであったり、紙やすり一個一個の粒子が点であることなどにすごく惹かれているからです。このときは、アパートの壁紙を紙やすりでつくってみることにしました。土壁って、かなりザラザラしていて紙やすりに結構近い質感をもっているなと思い、そこから発想しています。ドアの壁とか間仕切りの屏風みたいなところも、やすりが貼ってある。それぞれの部屋でやすりの番数を変えていて、その中で微妙な質感の違いがでてくる。ここに住む人は、壁を傷つけると同時に自分が削られるという構造をもった作品です。

もう一つ、やすり繋がりがあります。紙やすりが額に入っている作品です。ただの紙やすりじゃなくて、紙やすりをレーザープリンターでコピーしたものです。紙やすりで、何かを削ると物がツルツルになる。じゃあ逆に、やすりをどうやったら、やすれるだろうというふう考えたときに、スキャナーでデータ化してしまうと、それって、やする行為にすごく近いのでは、と考えました。《Sandpaper》(2014) という作品です。

■ その他の作品 ④箱



fig. 10 《All Over Object (Crate)》 2012 木 個人蔵

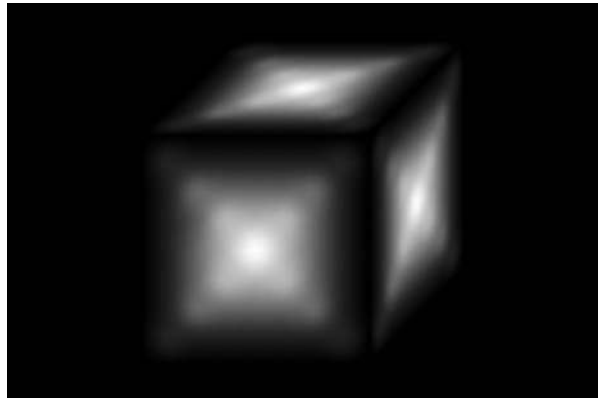


fig. 11 《Hollow》 2014- デジタルデータ 作家蔵



fig. 12 《Nissed》 2009- ラインテープ 個人蔵



fig. 13 《Mass》 2009- ラインテープ 作家蔵

松延 次は箱についての作品です。海外に美術作品を運送するときに、木のクレートを使うのですが、それをモチーフにしました。《All Over Object (Crate)》(fig.10)。側面を見るとわかるのですが、中に丸太がそのまま入っている。丸太の周りにプロテクターをつけると、「中身をもたない箱」「絶対に壊れない箱」「中身と外身が一体化した箱」、そういう箱がつかれるなと思いました。これはクレートでもあるので、運搬するときもこのままです。他の美術作品みたいに壊れないように一生懸命梱包することはありません。

《Hollow》(fig.11) はデジタルデータの作品です。この画像をそのまま壁にプロジェクションしたり、ブラウン管の奥行きがあるモニターに映したりしています（液晶モニターはあまり使いません）。立方体のそれぞれの面に光が反射しているように見えるにもかかわらず、中身は何もない、単に光しか存在していない立方体という作品です。

《Nissed》(2009-) (fig.12) は僕のデビュー作です。写真で見るとスケッチのように見えたりすると思うのですが、これは立体物のアウトライン（縁）に黒い線を描くことで、立体物が平面のように見えています。もう一つ《Mass》(fig.13) も同じくアウトラインをとった作品です。紙を積み上げてできた、紙の立方体のアウトラインを縁取っています。アウトラインをとると、紙が

水平に積み重なっているにもかかわらず、紙を折ってつくったように軽く見える。本当はとても重いのですが、質感が全部飛んでしまって軽いものに見える作品です。

■その他の作品 ⑤棚



fig. 14 松延総司 《Shelves》 2013 ベニヤ 作家蔵

松延 僕の作品に限らず、箱状の作品とか本をモチーフにした作品というのは、本当にこの世にたくさんあります。

箱と本に並んで、僕が好きなものは棚です。僕は棚がとても好きです。この「ねじれたライブラリールーム」をやるときも棚の作品を出そうかなと思ったのですが、あまりにも味気ないものだったのでやめました。ここでいくつか紹介したいと思います。

僕がつくった棚《Shelves》です。大きい四角の作品は、全面が閉じられている立方体と、その間に挟まった薄いベニヤの組み合わせでできています。ひっついていてではなく、単に組み上げているだけ。棚はいろいろなところにある物ですし、なおかつ僕らは、いろいろな物を棚にすることができます。椅子とか机も、その上に物を置いてしまったら、それは棚と呼べると考えました。そうすると、ホームセンターなどに棚という物は売っているけれども、中に物を入れるまでは実は棚じゃない。棚として売ってはいるが、それを棚として使うかどうかというのは、自分次第で、それはまだ棚ではないと思ったのです。じゃあ、使われていないにもかかわらず、

棚と呼べる棚とはなんだろうと思ったら、その棚の中にあらかじめ何か物がいっぱい入ってしまっていて、それ以上使えない棚というものが、「本物の棚」なのではないかと考えました。この作品は、ベニヤ板を棚として立方体が収まっていると考えることもできるし、立方体が棚で、その間にベニヤ板が内容物として収まっていると考えることもできる。そうすると、お互いが棚の内容物であって、お互いが棚であるという構造をもたせることになり、「完全な棚」「完全に使い終わった棚」と呼べるのではないかと思ったわけです。

斜線がモチーフになった棚もあります (fig.14)。斜線が、ここにある空間はもう真っ黒ですよというサインだとするならば、棚板を斜線にすれば、まだ空間が残っているにもかかわらず、もう閉じられた棚であるといえるのではないかと思い、こういう斜線の棚をつくりました。

Ⅰ レファレンス

松延 レファレンスとして他のアーティストがつくった棚のような作品を見てみようと思います。一番ポピュラーなアーティストとしては、ドナルド・ジャッドという人がいます。誤解を恐れずにいうならば、彼は箱を作品にする人です。壁から突き出した箱が垂直方向に等間隔に並んだ作品《無題》は箱と呼ぶべきかわからないですが、それが積み重なることによって、棚のように見えます。もちろん、この上に物を置いたりはできないわけですが。彼の面白いところは、十分に棚っぽい作品をつくっているにもかかわらず、実際に使える棚をつくる。実際に使える椅子もつくるし、実際に使えるテーブルもつくっています。

ソル・ルイットというアーティストがいます。彼の作品には、壁に直接ドローイングを描く作品のシリーズや、ジャングルジムのように立方体を積み重ねた彫刻作品シリーズがあります。そして比較的マイナーな作品なのですが、*Autobiography* (1980) という作品がとても好きです。これはソル・ルイット自身の家の中とか身の回りを撮影した写真を中心に掲載した本の作品です。

本の中には多数の本の写真（棚に並んでいるであろう本の背表紙のみが映った写真）が掲載されており、それをグリッド上にレイアウトすることで本自体を本棚にするという実験が行われています。

また、本だけじゃなくて、本が下積みにしてあるものや、カセットなど、身の回りの物がいろいろ撮られています。すごいなと思ったのは、窓の格子なのですが、完全に線を表しています。ブラインドも完全に線。さらには時計などの時間です。身の回りの物といつつ、かなり意識的に時空間を扱った本の作品だと思います。

棚ではないですが、時間でいうと、もう一人、河原温という作家がいます。彼の有名な作品の一つで《One Million Years [Past]》(1969) という本になっている作品があります。中には、例えば「748215 BC」と書いてあります。BC は「Before Christ (紀元前)」の意味です。単に本の中に、紀元前 748215 年という数字。998031 B.C. から 1969 A.D. まで、年だけが書いてある 10 冊の分厚い本です。《One Million Years [Future]》(1981) もあります。さっきの

ルウィットの作品に似ているのですが、単に年号が棚に並んでいるようにして、本の中に配置してある。これは本当に本の中に棚をつくっているような感覚だと思います。年号だけを本の中に陳列している感じですね。

最後にマーティン・クリードという、現役で生きている作家です。《作品番号 916》(2008) は、箱をだんだん上に積み重ねていくうちに箱が小さくなる作品。《作品番号 701》(2007) は釘の背の高い順。《作品番号 928》(2008) は机の高い順。彼がつくる作品の、ルールに従って陳列していくという手法は機能と内容物を一体化させる僕の棚の作品とかなり親しいことなのではないかなと思います。彼の作品で、車のドアを全開にしたり《作品番号 1686》(2013)、一番有名な作品で、何もない展示会場のライトがふわ〜と点いたり、ほわ〜と消えたりする作品《作品番号 227：ライトが点いたり消えたり》(2000) があります。彼は何を空間として見せるかということにもかなり強い意識をもっているように思います。

最後にシンプルな棚を紹介しようと思います。《カールトン》(*Carlton*, 1981) は、エットレ・ソットサスというデザイナーが、今紹介したアーティストたちとおおよそ同じ年代につくった棚です。この棚も僕はとても好きです。とても素直にかっこいいと思います。

参加者④ 影響を受けた作家は、こういった作家ですか？

松延 そうですね。紹介したのはとても好きなアーティストですね。他にはドイツの写真家のベルント&ヒラ・ベッヒャー夫妻です。彼らは給水塔などの工業建造物を撮っています。ドイツ経済が発展した、たぶん第一次世界大戦のときにつくられた工場だと思うのですが、その工場を全部同じ構図で正面から撮っている作品です。それを並べる。一個一個見ると、一個一個の個性はあるのですが、それを離れて見たときに、全部違うのだけど、同じように見える。それはたぶん、僕が輪ゴムを撮っているのと同じ意識なのではないかと思っています。

【おわりに

松延 最後に、今ここにある本を紹介します。熊本市現代美術館内に作品が設置されている作家の関連書籍がおかれています。モニターの作品《Death Clock for Participation in CAMK》(2005/2007) と数字の柱の作品《Opposite Vertical on Pillar -133651 series-》(2002) がある宮島達男、図書室の作品《Library for Human Use》(2002) や女の人が男の人を抱きかかえている写真作品《Modus Vivendi -Pieta-》(1983/2002) のマリーナ・アブラモヴィッチ、天井の青い光の作品《MILK RUN SKY 2002》のジェームズ・タレル、階段下に覗くような水玉の作品《早春の雨 2002》がある草間彌生、といったアーティストの作品集です。草間彌生は作品集より小説を多くおいています。展示室の奥にあるのは、図書館についての本ですよ。

池澤 そうです。図書館や本屋、古本屋、小説や文字、グラフィックデザイン、印刷物などに関する本です。

松延 本についての本ですね。作家の関連書籍についてはホームギャラリーの対比として見せようという意図があります。本についての本は、図書空間自体について考えるという意図があります。通常ホームギャラリーには出していない本もあります。

さっき見つけた僕のお薦め図書は、『日本十進分類法』という二冊組の本です。何だろう？と読んでみたら、図書館の本の背に貼ってある分類シール、その分類わけをどうするかという本なんです。中を見てみると、例えば「経営学史 335.12」とか「軍服 395.5」「ジュゴン 489.67」「手芸 594」とか、そういうことがこの本の中に集約されている。では、この本そのものはいったいどういう分類なのだろう？と考えたりしました。

あと、自分の経験なのですが、僕はちょっと前まで京都に住んでいました。京都はよく古本市をやっていて、ある日古本市に行ったのですが、そのときは面白い本がありすぎて、路頭に迷ってしまいました。

あまりお金も持っておらず、何を買って帰ろう？と思ったときに、僕の目に飛び込んできた本が『書物』という本でした。これを一冊買ったなら書物を買ったことになるんじゃないかと思って手に取ったとき、「あれ？」と思いました。隣に『理想の書物』という本があったんです（笑）。それで『書物』と『理想の書物』の2冊を買って帰りました。この会場もそういう経験をする空間かなとちょっと思っています。

参加者⑤ 今までの話と最初に話された「ねこがねころんだ」の繋がりについて、話していただけますか？

松延 棚の話をしていたとき、僕は「棚」というワードを何回も何回も言っていると思うんです。それはダジャレにはなっていないのですが、「棚は棚であるために」「棚が棚らしくあるために」「棚とはなんだろう」ということに繋がっているのだと思います。「ねこがねころんだ」は本当よくできているダジャレですが、「棚ってなんだろう？」とか「石ってなんだろう？」「石とは？」「猫とは？」「棚とは？」と、そういうふうは何回も反復するわけです。「ねこがねころんだ」と同じように、「石」を定義するために、石じゃないものから石をつくる。棚をつくるために、棚じゃないものから棚をつくる。そうやって、本物の棚と僕がつくった棚、自分が知っている棚と僕がつくった棚が、頭の中で何回も何回も反復する。そういうことが作品の中でできればいいなと思っています。「ねこがねころんだ」というのは、そういうことかなと思っています。

参加者⑤ 「石が石であるための絶対条件」を納得いくまでされているのかなという感じがして聞いていました。

松延 そうですね。この危険なところは、僕は今 30 歳なのですが、30 年生きてきて、たぶん

僕が石に対して思っている見方と、みなさんが石に対して思っている見方は、絶対にずれがあると思います。なので、僕がいくら石のことを自分なりに追究しても、どこかでやっぱりみなさんが見ている石と違い、「え、そうなの?」「え、石ってそんなもんじゃないよね」というところがあったりすると思います。「そうやって自分の価値観を人に押しつけるな」とか、たまに友達に言われたりします（笑）。そこは、自分の中で今後、どう解決していけばいいのかなと、いつも思っているところですね。

池澤 さきほど質問した《My Stones》（私の石）の「私の」という言葉が少し気になったのは、そういう点かもしれません（笑）。今回のイベントは、「私の石」を囲んで石庭のように眺めながらトークを聞く興味深い機会になったと思います。では本日のアーティストトークは終了します。



編集：松延総司、池澤茉莉

※本掲載にあたり、松延総司が「ねこがねころんだ」を中心に改めて加筆し、池澤茉莉がトーク及び質疑応答を再構成した。

※ figs. 1-8, 10-14 Photo by Soshi Matsunobe

展示風景

